

後期旧石器時代前半期における日本海沿岸域の石器石材ネットワーク

The lithic raw material network of the coast of the Japan sea region in the early upper palaeolithic

中村 由克^{1*}

Yoshikatsu Nakamura^{1*}

¹ 野尻湖ナウマンゾウ博物館

¹Nojiri-ko Museum

始良 Tn 火山灰 (AT ; 29ka) 降灰期よりも以前の後期旧石器時代前半期は、環状ユニットが存在し、局部磨製石斧が使われた時代であり、その後とは異なった石器文化がみられた。旧石器時代の石斧は、全国で約 800 点報告されているが、従来、十分な石材の鑑定と研究がされていなかった。これらの石斧 342 点の石材を a 実体顕微鏡観察、b 比重測定、c 磁石による磁性テスト、d 帯磁率測定などの方法で鑑定した。この結果、とくに蛇紋岩とされていたものは、純粋な蛇紋岩はなく、全く違う岩石も含まれていることが判明し、後期旧石器時代前半期の人類の移動について興味深い知見が得られた。

旧石器時代石斧の石材： 千葉県などで多く出土していて、蛇紋岩とされてきたものは緑色岩（玄武岩質凝灰岩や玄武岩を起源）と角閃岩であり、蛇紋岩とは全く関係がない岩石であった。一方、日本海側で蛇紋岩とされていた石材は、蛇紋岩がなくほとんどが透閃石岩であった。透閃石岩は、透閃石（トレモライト）と緑閃石（アクチノライト）が集合した岩石である。緑閃石は透閃石の Mg の一部が Fe に置き換わることで連続的な固溶体をなす一連の鉱物である。

透閃石岩の産地： 透閃石岩は青海-蓮華地域とされる姫川流域とその西側の青海川に多くある蛇紋岩体の中に産出する。この地域には 1) 姫川本流沿い、2) 青海地域、3) 姫川支流の大所川上流～朝日岳地域、4) 姫川最上流の白馬八方地域という 4 つの蛇紋岩地帯がある。日向林 B 遺跡の石斧の自然面の観察から、表面に凹凸部を残した 15～20cm 以上の円礫～亜円礫の大礫を用いている。このような透閃石岩の礫があるのは、上記 4) の白馬村松川流域である。

日本海沿岸域の石材ネットワーク： 透閃石岩の石斧は、富山地域（ウワダイラ I、白岩藪ノ上など 13 点/10 遺跡）、野尻湖遺跡群（日向林 B、貫ノ木、仲町など 183/19）、飯山市（太子林 1/1）、新発田市（坂ノ沢 C8/1）、秋田市（地藏田 1/1）および安中市（古城 1/1）、諏訪市（茶白山 1/1）、北杜市（横針前久保 1/1）、飯田市（竹佐中原 1/1）などに分布が確認された。

野尻湖周辺では透閃石岩製の石斧が大量に出土しており、砥石が伴うことから仕上げ加工がされていて、ここから日本海沿岸域に石斧が運ばれたと推定される。台形石器などの剥片石器の主要石材は、富山（碧玉（鉄石英）・玉髓）、野尻湖（黒曜石・玉髓）、新潟（玉髓・珪質頁岩）、秋田（珪質頁岩）と地域ごとに変化がみられる。このように、富山から秋田までの日本海沿岸域に、在地の石材を取り込みながら、青海-蓮華地域原産の透閃石岩を主体に、少量の緑色岩や角閃岩をまじえて、広く分布がみられる。一方、透閃石岩の石斧は、信州黒曜石原産地などをのぞき、太平洋側にはもたらされなかったと思われる。

石斧石材から見ると、後期旧石器時代の初めの時点で日本海沿岸域に独自の石材ネットワークができあがっていたことを意味する。日本列島内に地域性が顕著になるのは、これまでおおむね AT 降灰以降の時期に、ナイフ形石器群の文化圏が出来上がる以降と考えられてきたが、それ以前からこのような地域性が誕生していたことを示唆する。

キーワード: 後期旧石器時代, 日本海沿岸域, 石器石材, 石斧, 透閃石岩

Keywords: upper palaeolithic, the coast of the Japan sea region, the lithic raw material, stone axe, tremolite rock